

< 翻 訳 >

## 叙事詩の宗教哲学

—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXX) <sup>1</sup>—

茂木 秀 淳 信州大学教育学部社会科学教育講座

キーワード：ウシャナス， パラーシャラ， ダルマ， 祭式

[278 章] (B.289 章, C.10659-10696, K.295 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) 父よ、私は心に常に次のような関心 (kautūhalam) をもっている。それについてあなたから聞きたい、クル族の祖父よ。
- (2) 常に靈感にあふれ (kāvyā) 偉大な心を持つ神仙ウシャナスは、何故アスラの好む事を為し、神々の好まぬことに喜ぶのか。
- (3) なぜ限りなき精力をもつ者たちの輝き (tejas) は増したのか<sup>2</sup>。(また何故?) ダーナヴァたちはすぐれた神々と敵意によって結ばれているのか。
- (4) そしてウシャナスは、どのようにして汚れなき輝きをもつ金星 (śukratva) となったのか。またどうして彼は繁栄 (ṛddhi) を得たのか。そのすべてを私に語るべし。
- (5) またどうして彼は輝きをもちながら天空の<sup>3</sup>中央を進まないのか<sup>4</sup>。それを残りなく私は知りたい、祖父よ。

ビーシュマは言った。

- (6) 王よ、注意深くこのすべてをありのままに聞くべし。意図された通りに正しく私はかつてこのように聞いたのである、汚れなき者よ。

<sup>1</sup>本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXIX)—』(信州大学教育学部研究論集第4号 2011年3月 pp.225-236) に続くものである。略号などは前稿に準ずる。本稿で用いる主なものは以下のとおりである。

Hopkins[1901]: E.W.Hopkins, *Yoga-technique in the Great Epic*, JAOS vol.22, pp.333-379, 1901.

Oberlies[Grammar]: Thomas Oberlies, *A Grammar of Epic Sanskrit*, Indian Philology and South Asian Studies, ed by A.Wezler and M.Witzel, vol.5, Berlin-New York, 2003.

Hara[2006]: Minoru Hara, *Hindu Concept of Shame —Sanskrit lajjā, vṛiddhā, hrī*, Indologica Taurindensia, vol.XXXII, Tirino, pp.141-195, 2006.

<sup>2</sup>vardhayāmāsa tejaś ca Cn. vardhayāmāsa, ciccheda / (「増した」とは「止まった」という意味である。) N. の解釈では、意味が反対になる。N. は「ウシャナスは神々の威光を減少させた」と解している。しかし、ciccheda を vardhayāmāsa の同意語として解釈することは可能であろうか。

<sup>3</sup>nabhasaḥ Ca. nabho 'tra mūrdhākāṣaṃ brahmarandhram / (天空とは、ここでは頭蓋の空間、頭頂の穴である)

<sup>4</sup>na yāti ca Cs. nayāti ceti / sāyaṃ prātaś ca nabhaso 'ntarbhāgayor dṛśyate na kadācid api madhye / tac ca kasmād ity arthaḥ / (「進まない」とは、(この者は) 夕方と朝に、天空の二つの内側部分 (両端?) において見られ、決してその中間には見られない。それは何故か、という意味である)

- (7) このパールガヴァ(すなわちシュクラ)の息子であり、誠実にして<sup>5</sup>、誓い堅固な尊者ウシャナスは、本来哀れみに基づいて<sup>6</sup>アスラたちにとってよきことを為した<sup>7</sup>。
- (8) 一方、かの<sup>8</sup>財産を与える王(クベーラ)は、力強く<sup>9</sup>、夜叉と羅刹を支配し、宝の倉の支配者であり (pravaviṣṇu), そして世界の主であった。(Cf.Hopkins[1901] p.358; prabhaviṣṇu)
- (9) ヨーガを完成した偉大な尊者(ウシャナス)は、彼の(クベーラ)の身体に入り込んで<sup>10</sup>、富の主である神(クベーラ)を支配して (ruddhvā), ヨーガを用いて財産を奪った。
- (10) 富を与える神(クベーラ)は、財産を奪われると、寄るべがなくなった。彼は、怒りに満ち、興奮して (saṃvigno), 至上の神(シヴァ)を訪ねた。
- (11) そこで、彼は、威光無限にして、すぐれた神であり、恐ろしく (rudra) もあり溫和 (saumya) でもあり、多くの姿をもつシヴァ神に(次のように)告げた。

クベーラは言った。

- (12) ヨーガを本性とするウシャナスによって支配されて、私の財産は奪われた。大きな熱力をもつ者は、ヨーガによって身体の(通る)道を作って<sup>11</sup>、出て行った。(Cf.Hopkins[1901] pp.358-359)

ビーシュマは言った。

- (13) 偉大なヨーガ行者である大自在神は、これを聞いて怒り、目を赤くして、槍を取って立ちあがったのである、王よ。
- (14) 彼は、最上の武器 (paramāyudha) を取って、「その者はどこだ、その者はどこにいる」と大声を発した。ウシャナスは、彼の意図を知って、遠くに現れた<sup>12</sup>。
- (15) かの力ある者(ウシャナス)は、偉大な大ヨーガ行者のその怒りを知って、逃げるか (gati), 立ち向かうか (āgamana)<sup>13</sup>, そのまま留るか<sup>14</sup>, 考えた (vetti)。

<sup>5</sup>P. satyo D..K.: mānyo

<sup>6</sup>P. nimite karuṇātmake D..K.: nimite kāraṇātmake Cn. kāraṇātmake, kāraṇā kriyā tadātmake / (kāraṇātmake とは, kāraṇa とは行為であり, それを本質として, という意味である)

<sup>7</sup>P. asurāṇām priyakaro D..K.: surāṇām vipriyakaro

<sup>8</sup>P. sa ca D..K.: sadā

<sup>9</sup>indro Ca. indra iti dhanadaviśeṣaṇam, pāramaiśvaryaogāt / (indra とは, 財産を与える王の形容詞である。最高の自在力との結合によって, という意味である)

<sup>10</sup>tasyātmānam athāviśya N. ātmānam śarīraṃ / (ātman とは身体である)

<sup>11</sup>P. yogenātmagatim kṛtvā D..K.: yogenātmagataṃ kṛtvā Cs. ātmagatim, nihsaraṇamārgam ro-makūpādikam / (ātmagati とは, 毛穴など外に出る道である) Deussen: durch Yogakunst in meinen Leib hineinfuhr und ihn wieder verlies.

<sup>12</sup>P..D.: babhau K. hy abhūj Cn. babhau, ātmānam darśitavān / (「現れた」とは, 自分を見せた, という意味である)

<sup>13</sup>āgamana 「近づく」は、「降伏する」か。 Deussen: gegen ihn angehen Ganguli: he should go to Maheswara

<sup>14</sup>P. sthānam veti D..K.: sthānam caiva

- (16) ヨーガの神通力 (yogasiddha) を本性とするウシャナスは、恐ろしい苦行によって偉大な大自在神を想念して、槍の先端に現れた (pratyadr̥ṣyata)。 (Cf. Hopkins[1901] p.359; yogasiddha)
- (17) 彼ウシャナスは、その時、苦行を完成し<sup>15</sup>矢を手にした神によって、姿を知られてしまった。神の主 (シヴァ) は、(槍の先端にいるのを) 知って、槍を手で曲げた。
- (18) その槍は無限の輝きをもつ手によって (pāninā)<sup>16</sup>曲げられたので (ānatenā), その恐ろしい武器を手にした主シヴァは、それを「ピナーカ pināka」と呼んだ。
- (19) ウマーの夫たる主シヴァは<sup>17</sup>, バールガヴァが手の中に入ったのを見て、口をあけて、静かに手を口に当てた<sup>18</sup>。
- (20) この偉大なブリグの息子、力あるウシャナスは、大自在神の腹 (koṣṭha) に入り、そこで動き回った。

ユディシュティラは言った。

- (21) 王よ、ウシャナスは何のために、かの思慮ある神の中の神の (devadevasya) 腹中で動き回ったのか。そしてまた、大威光のウシャナスは何をしたのか。

ビーシュマは言った。

- (22) かつて、かのシヴァ神は、偉大な誓約をもち、水の中に行き、百万年、そして千万年、杭となって (sthāṇubhūta) いた。
- (23) シヴァ神は、この為し難き苦行を行なった後で、大きな湖から上がった。すると神を超えた神であるブラフマー神が彼に近づいて来た<sup>19</sup>。
- (24) (ブラフマー神は、) この不変の者に、熱力 (tapas) の増大について、そして、健康について尋ねた。そしてかの雄牛を旗印とする者 (シヴァ神) は「苦行は、首尾よく終わった」と言った。

<sup>15</sup>P. tapaṣiddhena D.,K.: tapaṣiddho 'tha

<sup>16</sup>pānināmitatejasā Cv. amitatejasā pāninā iti tṛtīyā saptamy arthe / (amitatejasā pāninā という具格は、処格の意味で用いられている)

<sup>17</sup>P.,D.: kakudī K. bhrakūṭim (次の pāṇim の形容詞) Ca. kakudī, kakudākhyagrīvānikaṭapṛṣṭhavam̐sonnata-pradeśarūpalakṣaṇavān / (kakudin とは、隆肉 (kakuda) と呼ばれるうなじに近い背骨の盛り上がった部分の姿を特徴としてもっている、という意味である) Cn. devānām paṭṭādhipatiḥ / (神々の冠 (?) を支配する者である) Apte は kakudin の意味を chief, superior として、用例として D. のこの箇所を挙げている。

<sup>18</sup>P.,K. pāṇim samprākṣipac chanaiḥ D. pāninā prākṣipac chanaiḥ

<sup>19</sup>P. brahmā samupasarpata (augmentless imperfect) D.,K.: brahmā vai samasarpata P. は D 句の韻律保持のために augment を付加しなかったと考えられる。(Cf. Oberlies[Grammar] 6.4.1 Augmentless imperfect pp.178-181 (ただし、この例への言及はない) D.,K. は augmentless imperfect を避けたか。

- (25) かのめでたき、偉大な心もち、その本性は計りがたく、常に真実とダルマを喜ぶシヴァ神は、それ(苦行の熱力)と結合したことで<sup>20</sup>、(ウシャナスが)増大したのを<sup>21</sup>見てとった。
- (26) そのため熱力と財産に富んだ、かの偉大な力強いヨーガ行者シヴァ神は、三界において輝いたのである、偉大な王よ。
- (27) それから、ピナーカ弓をもちヨーガを本性とするシヴァ神は、禪定のヨーガ(dhyāna-yoga)に入った。一方その時ウシャナスは、震えて腹の中で身を隠した<sup>22</sup>。
- (28) 偉大なヨーガ行者ウシャナスは、そのような状態で(tatras̥tha eva)、シヴァ神を讃えた。そして、外に出るのを<sup>23</sup>願ったが、熱力によって(tejasā)妨げられた<sup>24</sup>。
- (29) その時、偉大な尊者ウシャナスは、腹の中で繰り返し「私に恩寵を為すべし」と言った、敵を調伏する者よ。
- (30) かの三十神の主神(tridaśapuṅgava)マハーデーヴァは、あらゆる脈管を閉じて、彼に「男根を通して外に出ていけ」と言った。
- (31) かの尊者は、完全にとじ込められたために、出口が見つからないので、熱力によって焼かれながら、あちこちと歩き回った。
- (32) 彼は、精液(śukra)となって、男根を通して体外に出た後、その結果として<sup>25</sup>、彼は天空の真ん中に行くことはなかった<sup>26</sup>。
- (33) そして、外に出て、熱力によって光り輝くんばかりの(jvalantam iva)彼を見て、シヴァ神(bhava)は怒りにとりつかれ、槍を高々と挙げて立った。
- (34) 女神は、その怒った夫たる獣主シヴァを制止した。吉祥なるシヴァ神(śaṅkara)が制止された時、彼は女神の息子となった(putratvam agamat)。

<sup>20</sup>tatsaṃyogena N. tatsaṃyogena tapoyogena / (それとの結合によって、とは、苦行との結合によって、という意味である)

<sup>21</sup>vṛddhiṃ N. vṛddhiṃ śukrasyotkarṣaṃ / (増大とは、精液の増加である)

<sup>22</sup>niḥīye (Cf. Oberlies[Grammar] li p.503) N. niḥīye nitarāṃ gatiṃ jagāma babhṛamety arthaḥ / (「身を隠した」とは、下方の場所に行った、徘徊した、という意味である)

<sup>23</sup>niḥsāraṃ Ca., Cp.: niḥsāraṃ, ūrdhvamārgeṇa niḥsaraṇam / (niḥsāraṃ とは、上方の道を通して外に出ることである)

<sup>24</sup>P. kāṅkṣamāṇas tu tejasā pratyahanyata D., K.: kāṅkṣamāṇaḥ sa tena sma pratihanyate

<sup>25</sup>kāryena tena Cs. kāryeṇa tena, dhaneśvaradhanāpahāreṇa a maheśvarakopenādhaḥ srotoniḥsaraṇenety arthaḥ / (「その結果として」とは、クペーラの財産を奪ったので、シヴァの怒りによって、下降の流れを進行したために、という意味である)

<sup>26</sup>P. nāgacchata ca D., K.: nādhyagacchata

K. はこの詩節の後に以下の詩節を挿入している。

tata eva ca deveṣu sapraṭiṣṭho mahāmuniḥ /  
paurohityaṃ ca daityānāṃ cakre tejovivṛddhaye //

女神は言った。

- (35) 私の息子となったこの者を、あなたは殺すべきではありません。なぜならば、神の腹から出た者は、いかなる者であっても殺すべきではない<sup>27</sup>からです。

ビーシュマは言った。

- (36) それからシヴァ神は女神に満足し、笑いながら繰返し言ったのである、王よ。『この者は、望むままに行かせよ』と。

- (37) それから、望みをかなえる神シヴァ、そして女神ウマーに礼拝して、かくして (tad: Deussen: von dannen) 思慮ある偉大な尊者ウシャナスは望みの場所 (gati) に達した。

- (38) 汝が私に尋ねた偉大なパールガヴァの行跡は、このように汝に語られた、パーラタ族のすぐれた者よ。

[279 章] (B.290 章, C.10697-10722, K.296 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) さて次に、大きな腕をもつ者よ、幸福 (śreyas 善) とは何かを私に語るべし。私は、あなたの甘露のごとき言葉に飽きることはない、祖父よ。
- (2) すぐれた人よ、人は、いかなるよき行為をした後、この世でも死後でも、最高の幸福を得るのか、それを語るべし。

ビーシュマ仙は言った。

- (3) ここで私は、かつて誉れ高いジャナカ王が偉大なパラージャラ仙に尋ねたことを、ありのままに汝に語るであろう。
- (4) あらゆる生き物にとって、この世そしてあの世で、何が善か。(善と) 理解されるべきものを<sup>28</sup>、御身は余に語るべし。
- (5) すると、苦行に専念し、あらゆるダルマの規定を知り<sup>29</sup>、王に好意の心をもつ尊者 (muni) は、(次の) 言葉を語った。
- (6) この世でもあの世でも、ダルマが実行されることこそが善である。なぜならば、賢者たちの言うように、それよりすぐれたものはないからである<sup>30</sup>。

<sup>27</sup>P. nāśam archatī D. nāśam ṛcchati K. nāśam arhati

<sup>28</sup>pratipattavyaṃ N. pratipattavyaṃ jñātavyaṃ na tv anuṣṭhātavyaṃ kriyāsādhyasya śreyaso 'nityatvāpatteḥ / (「理解されるべき」とは、認識されるべき、という意味であって、実行されるべき、ということではない。善が行為によって達成されるべきであれば、(善は) 永遠でなくなるから)

<sup>29</sup>sarvadharmavidhānavit Ganguli: conversant with the ordinances of every religion (p.346) Deussen: aller Gesetze und Vorschriften kundige p.556

<sup>30</sup>D.,K. はこの詩節の前に、parāśara uvāca を挿入している。

- (7) 人はダルマを行った後、天界において幸福となる。すぐれた王よ、生きている者 (dehinām) の行為の規定は、ダルマを本質としている。それ (行為の規定) に基づいて、生活期にいる良き人々はこの世で自分の義務 (svakarma) を行なうのである。
- (8) 世間の道<sup>31</sup>は、息子よ、四種類規定されている。人々がその中に存在する世間の道は、欲望から (kāmat) 生じるのである。
- (9) 善悪の行為を様々な仕方 (vividhaiḥ kramaiḥ) 行なった後、生き物が五種 (の元素) に分解される時、多くの行き先<sup>32</sup>がある。
- (10) 器に金粉あるいは銀粉がふりかけられる (niṣicyate) のと同様に、人には以前の行為の力に従って (以前の行為の結果が) ふりかけられる。
- (11) 種子がなければ何も生じない。何もしなければ安楽を得ることはない。よき行為を行う人は、身体の滅に至って、安楽を得る<sup>33</sup>。
- (12) 親愛なる者よ、私は運命 (daiva) を認めない (na paśyāmi)。運命 (の存在) を証明するものはない。神々、ガンダルヴァ、ダーナヴァたち (の相違) は、自性によって (svabhāvatā) 成立している (saṃsiddhā) のであるから<sup>34</sup>。
- (13) 人々は、死後、前世の果報を得る時、前世の行為を<sup>35</sup>思い出さないのが常である。そして (果報の原因となる) 四種の行為も (思い出さないのが常である)。<sup>36</sup>
- (14) 世間の道のよりどころである言葉は、ヴェーダに基づいて、心の寂静のために作られたのである、親愛なる者よ。しかし長老の教えはそうではない<sup>37</sup>。
- (15) 目、心、言葉、(身体的) 行為によってなされた四種の行為に従って<sup>38</sup>、人は (行為の結果を) 得るのである (cf. MBh. XII. 279. 21cd)。

<sup>31</sup> lokasya yātrā N. yātrā jīvikā brāhmaṇasya pratigraho rājanyasya karādānaṃ vaiśyasya kṛṣyādi śuudrasya bhṛtir vetanam iti caturdhā / (「道」とは、生活手段である。バラモンは受納、王族は税金徴収、庶民は耕作など、奴隷の生活の糧は運搬、という四種である)

<sup>32</sup> bahudhā gatiḥ N. bahuvihā gatiḥ śruuyate, pāpinām tiryaktvaṃ puṇyavatām svargas tayoh sāmye mānuṣatvaṃ tattvajñānenocchede muktir iti / (多くの行き先が伝えられている。悪人は動物、善人は天界、善悪が等しい場合には人間、真理の認識によって解脱、というように)

<sup>33</sup> P. sukṛtī vindatī sukhaṃ D., K.: sukṛtair vindate saukhyaṃ

<sup>34</sup> Ganguli: Verses 12 to 14 represent the theory of sceptic, and I have translated them as such. (p. 347, fn. 1)

<sup>35</sup> P. jātikṛta karma D., K.: yāntyakṛta karma

<sup>36</sup> karma cāpi caturvidham N. caturdhaṃ karma puṇyapāpaṃ nītir anitīś ceti tatkāraṇatvena tulyavat smaranti / (「四種の行為」とは、善・悪・徳・不徳の四種であり、それらを原因としているので、(それらを区別せずに) 等しいものであるかのように想起するのである)

<sup>37</sup> naitad vṛddhānuśāsanam N. ata etad daivapratipādanam vṛddhānām bṛhaspatyādiinām lokāyatāgamapraṇetīṇām śāsanam na bhavati / (運命を提示という、プリハスパティを始めとするローカーヤタ派の伝承を説く者たちの教えは、そうではない、という意味である)

<sup>38</sup> 4種類の行為は、第13詩節からつながり、第14詩節は第15詩節で4種の行為の一つとしてあげられる「言葉」について説明するという転倒した順序になっている。

- (16) (身体的) 行為は、直接的にそしてまた混合して<sup>39</sup>(結果として) 熟するのである<sup>40</sup>、王よ。しかし(なされた行為が) 善行であっても悪行であっても、それが消滅することはない。
- (17) 苦から開放されるまで輪廻に沈む者にとっては、時には、善行は、頂上にいるがごとくである<sup>41</sup>、親愛なる者よ。(Cf.Śankara's Vedāntasūtrabhāṣya III.i.8)
- (18) それゆえ、人は、苦の滅をなして、善行に専心し、善行の滅によって悪行に(専心するのである)。このことを知るべし、人々の王よ。
- (19) 自制、忍耐、堅固、活力(tejas)、満足、真実語、羞恥(hri)、不殺生、不放逸(avyasanitā)、そして勤勉は安樂をもたらすものである。(Cf.Hara[2006] p.184.fn.53, hri)
- (20) 人は、悪行に、あるいは善行にも、心引かれないことは<sup>42</sup> ないであろう。(それ故) 賢者は常に心の集中に努力すべきである (manaḥsamādhāne prayateta)。
- (21) 人は (ayam)、他人の善行あるいは悪行をも享受することはない。(自分の) なした行為に見合った(果報)を得るのである (cf.MBh.XII.279.15cd)。
- (22) 人は、楽と苦に(心を)集中するならば、この道を行く<sup>43</sup>。(楽と苦に)結びついた者 (saṃgata) はすべて別の道を行くのである、王よ<sup>44</sup>。
- (23) 他人に対して非難するようなことを、人は自らなすべきではない。なぜならば(他人がしたならば)非難する人が (asūyus) そのようにすると (tathāyuktaḥ)、嘲笑を招くからである。
- (24) 臆病な王族、何でも食べるバラモン、無気力なヴァイシヤ、怠惰な低カーストの者 (hīnavarṇa)、徳なき賢者、品行なき貴人 (kulina)、あるべき姿から逸脱した (satyād bhraṣṭa) バラモン、心根悪しき女<sup>45</sup>、
- (25) 執着ある解脱者、自分の為に料理する人、雄弁な愚者、王のいない国、これらすべて、そして、家臣への愛情のないふさわしからぬ王族は、王よ、憂うべきものである。  
(Cf.Hopkins[Great Epic] p.325; metre Vaiśvadevī)

<sup>39</sup>nirantaraṃ ca miśraṃ ca N. kadācin nirantaraṃ duḥkhaṃ eva labhate kadācit sukhaṃ eva labhate kadācin miśraṃ yugapadubhayaṃ labhate pāde me duḥkhaṃ haste me sukhaṃ iti / (ある時は、直接的に苦のみを獲得し、ある時は楽のみを獲得し、ある時は、混合して両者を同時に獲得するのである。私の足には苦が、手には楽が、というように)

<sup>40</sup>P. phalate D.,K.: labhate Cf.Oberlies[Grammar] phal p.469

<sup>41</sup>kūṭhasthaṃ iva tiṣṭhati N. kūṭasthaṃ pakṣapātaśūnyaṃ duṣkṛtā virodhenety arthaḥ / (「頂上にいる」者は、執着を欠いている。悪行はその反対に(欠いていない)、という意味である)

<sup>42</sup>P. na jantur ayato bhavet D.,K.: na jantur niyato bhavet

<sup>43</sup>anyena gacchati N.anyena jñānavartmanā gacchati / (この道を行く、とは知識の道を通して行く、という意味である)

<sup>44</sup>P. pārthiva D.,K.: pārthivaḥ N. は pārthiva (地上的なもの)とは、妻・息子・家畜・家・財産・歓喜などとしている。

<sup>45</sup>P.,K.: brāhmaṇaḥ strī ca duṣṭā K. brāhmaṇastrī ca tuṣṭā

## [280 章] (B.291 章, C.10723-10746, K.297 章)

パラージャラ仙は言った。

- (1) 感官の対象を馬とする願望の車に乗り<sup>46</sup>、知識より生じた手綱によって<sup>47</sup>進む人は、英知ある人である。
- (2) 生計なき者の、依存しない心による (asritena manasā), (神々への) 崇拜は (sevā) 称賛される<sup>48</sup>。その崇拜は、再生族の手によって成就するのであり (?)<sup>49</sup>、相互に等しき者によって<sup>50</sup>ではない。
- (3) 得がたき<sup>51</sup>命を得たならば、(ただそれを) 引きづるべきではない<sup>52</sup>、人々の主よ。人は善行によって、(ヴァルナの) 上昇のために努めるべし。
- (4) その人は、種姓から逸脱しても<sup>53</sup>、尊敬に値する<sup>54</sup>。しかし、よき行為を受けた後<sup>55</sup>、汚れた行為を (rājasam karma) 行う者は尊敬に値しない。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.180; (The Colors of the Soul)
- (5) 人は、善行によって高い種姓を得る。得がたきそれを得ない人は<sup>56</sup>、悪行が(その獲得を) 妨げたのであろう。

<sup>46</sup>manoratharatham prāpya indriyārthahayam a 句と b 句の間の sandhi 不規則 (prāpya indriyārthahayam)。 (Cf.Oberlies[Grammar] p.7, 1.1.2. Absence of praśliṣṭa-sandhi)

<sup>47</sup>raśmibhir jñānasambhūtaiḥ Cn. raśmibhiś cidbhābhir gacchati, viśayāṃś cinmayatvenaiva paśyati / (手綱すなわち心という光によって進む、そして対象は心からなるとのみ見る) Cp. jñānasambhūtaiḥ, sārāsārvivecakarūpaiḥ / (「知識より生じた」とは、核心と非核心の区別を本質とする、という意味である)

<sup>48</sup>sevāsritena manasā vṛtīhīnasya śasyate Cn. sevā, bhaktidhyānarūpeśvaraprañidhānam / [a]sritena, yat kiṃcid ālambanam anāsritena manasā / (「崇拜」とは、帰依と瞑想の姿をした自在神の誓願を(崇拜すること)である。「依存しない」とは、いかなる行為でも依存しない心によって、という意味である) Cp.(vṛtīhīnasya) hīnasya sūdrasya / (生計なき者とは、奴隷sūdra のことである)

<sup>49</sup>dvijātīhastān nirvṛtā Cn. he dvija / atihastāḥ atikrāntakarmā brahmavit / tam prāpya nirvṛtā niṣpannā / (「再生族」は呼格である。「手を越えた」のは超越した行為をもつ者、ブラフマンを知る者である。それに到達して、「為す」とは、成就した、という意味である) N. に従うと、「再生族よ、行為を超越し、ブラフマンを知る者によってなされる」という意味になる。

<sup>50</sup>P. tulyāt parasparam D..K.: tulyāt parasparāt Cn. paroḥśajñānīnām na parasparopadeśe 'dhikārah, kiṃ tv aparokṣajñāny eva upadeśā yukta ity arthaḥ / (神秘の知識をもつ者の職務は、相互の教示ではない。そうではなくて、神秘ではない知識のみ教示する者がふさわしい、という意味である) Cp. te dvijātayaḥ parasparam tulyā na bhavanti / ataḥ brāhmaṇasevāyāṃ sambhavatyāṃ nānyau sevānyau / (彼ら再生族は相互に等しくはない。従ってバラモンの崇拜がふさわしい時、他の二者は崇拜すべきではない)

<sup>51</sup>(nasulabham Cf.Oberlies[Grammar] pp.359-360 (c) na-compounds

<sup>52</sup>nāvakarṣed Cn. na avakarṣet, viśayasevanair na nāśayet / (「引きづるべきではない」とは、ものを崇拜することによって滅させるべきではない、という意味である) Cp. pāpācaraṇena kṣīṇam na kuryāt / (悪行によって消滅させてはならない、という意味である)

<sup>53</sup>P. varṇebhyo 'pi paribhraṣṭaḥ D..K.: varṇebhyo hi paribhraṣṭaḥ Ca. varṇebhyo 'pi paribhraṣṭaḥ, varṇasamkarajo vety arthaḥ / (「種姓から逸脱しても」とは、種姓の混合という意味である) Cn. varṇebhyo, vṛtragītāsūktebhyāḥ ṣaḍbhyāḥ, kṛṣṇadhūmanīlarakatāhāridraśuklebhyaḥ, sattvarajastamasam hrāsa-vṛddhitāratamyāt kalpītebhyāḥ / (varṇa 色とは、ヴリトラの歌の詞から六種、黒、灰色、青、赤、黄色、白が、純質・激質・闇質の増加の割合から考えられている) (cf.MBh.XII.271.33 靈魂の6種の色) /

<sup>54</sup>P. sa vai saṃmānam arhati D..K.: na vai saṃmānam arhati

<sup>55</sup>satkriyām prāpya Cp. satkriyām, brāhmaṇasaṃskāram / (「よき行為」とは、バラモンの浄化儀礼である) Cs. upanayanādīsaṃskārah satkiryā, tām / (「よき行為」とは入門式などの浄化儀礼である。それを)

<sup>56</sup>alabdā N. alabdā kupuruṣaḥ / (「得ない人」とは、悪しき者である) alabdā は labdḥからの造語 alabdḥの主格か。(Cf.Renou, p.612)

- (6) それと知らずになされた悪行は、苦行によって<sup>57</sup>追い払うべし。なぜならば、悪行は、意図的になされた (svayaṃ kṛtam) 時、悪の結果をもたらすからである。それゆえ、苦の果報を生じる悪行を行ってはならない。
- (7) もしも、悪に結びついた行為の果報が大きいとしても、賢者は、その行為を為すべきではない。清浄な人が汚れた水を<sup>58</sup>(飲むべきではないのと) 同様に。
- (8) 「私は、悪しき行為の果報として、何か悪きものと見ることがあろうか<sup>59</sup>」(と言うならば)、解脱している人でさえも<sup>60</sup>アートマンはしばらくは (tāvad) 輝くことはない(と答えよう)。
- (9) 愚かな者にはこの世では解脱は<sup>61</sup>生じない。彼には死んだ時にも<sup>62</sup>極めて大きな苦が生じる。
- (10) 埃のついた<sup>63</sup>衣服は、きれいになるが、黒く染まった<sup>64</sup>衣服はそうはならない。人の王よ、努めてこのように悪を私から聞くべし。
- (11) 意図して (svayaṃ) 悪をなした後に、善を行う者は、贖罪をなすならば (kartum)、両者 (の果報) をそれぞれ得るのである。

<sup>57</sup> tapasaiva Ca. tapasā, prāyācittarūpeṇa / (「苦行」とは、贖罪を本質とした苦行である)

<sup>58</sup> P. kusālināṃ D..K.: kuśalināṃ N. kuśalināṃ kārukaṃ caṅḍālavīṣeṣam ity arthaḥ / (kuśalin とは、職人であり、チャンドーラの種類である、という意味である)

<sup>59</sup> kiṃkaṣṭam anupaśyāmi Cn. kutsitaṃ ca tat kaṣṭam ca kiṃkaṣṭam / (それは悪いという非難が、「何が悪い」kiṃkaṣṭam である (?)) Cs. (reading kiṃ kaṣṭam anu paśyāmi): kaṣṭam anu kiṃ paśyāmi, kṛcchram anukṛtya vartamānapāpasya karmaṇaḥ phalaṃ kiṃ paśyāmi, na kim apīty arthaḥ / (「悪に従うものを何を見ようか」とは、苦行を行った後に、存在している悪行のどんな結果を見ようか、何も見ない、という意味である)

<sup>60</sup> P. pratyāpannasya hi sato D..K.: pratyāpannasya hi tato Ca. pratyāpannasya, tattvajñānāt saṃyogahetuto nivṛttasya / (pratyāpanna とは、真理の認識によって (真理との?) 結合に基づいて、行為を停止した者) Cp. pratyāpannasya, sarvato viraktasya / (一切から欲望を断つた者) Cs. pratyāpannasya, anutāpena pāpān nivṛttasya / (pratyāpanna とは、苦行によって悪を停止した者である) Cv. pratyāpannasya, pratyāpattimataḥ, jñānina ity arthaḥ / (pratyāpanna とは、無関心の心をもつ者、知識ある者という意味である) N. pratyāpannasya vipāitadrṣṭeḥ / anātmā dehādir eva viśeṣeṇa ātmatvena rocate / (pratyāpanna とは、転倒した見解である。anātman とは身体などであり、身体などの anātman が特別なアートマンとして輝く、という意味である) N. は pratyāpanna を pratyāpanna と置き換えて、否定的な意味に解している。すなわち pratyāpanna とは、アートマンについて誤った見解をもつ者と解されているが、他の注釈はすべて解脱に向かう者と解している。

<sup>61</sup> pratyāpattī ca Cn. pratyāpattīḥ, vairāgyam / (pratyāpatti とは離欲である)

<sup>62</sup> prasthitasya Ca. prasthitasya, maraṇadaśāpannasya / (prasthitasya とは、死の時が至った者のことである) Cn. prasthitasya, yoge pravṛttasya, uttarabhūmyalābhāt tāpo jāyate / prasthitasya, mṛtasya vā tāpo narakajāḥ / (prasthitasya とは、ヨーガを行う者であり、高い境地に到達できないので苦が生じるのである。あるいは、prasthitasya とは死者にとっての地獄から生じる苦である) Cs. prasthitasya, paralokaṃ gatasya / (世界に去った者のことである)

<sup>63</sup> viraktaṃ Cn. viraktaṃ, svataḥśuddhaṃ sad viparītena rāgeṇākṛāntam / (virakta とは、本来清浄に存在するものが、対立する執着に支配された (vi-ra-k-ta), という意味である) Cp. viraktaṃ, kiṃcinmalinam / kṛṣṇa atyantamalīnyenopasaṃhitam / (virakta とは、少し汚れた、という意味である。kṛṣṇa の語によってひどい汚れに染まったことが意味されている) Cv. viraktaṃ, viśeṣeṇa rajasā yuktam / (とりわけ埃のついた)

<sup>64</sup> kṛṣṇopasaṃhitam Cn. kṛṣṇa, bhallātakena upasaṃhitam raktam na śodhyate / (kṛṣṇa, すなわちカシューナツの実と結びついたもの、すなわち染まったものは、きれいにならない)

- (12) 「不殺生は<sup>65</sup>、知らずに為された殺生(の罪)を除く」と、ブラフマンを語るバラモンたちは、聖典の教示に基づいて、このように (iti) 言った。
- (13) そして、意図してなされた(殺生の罪)は、それを為した者の殺害のみが除く<sup>66</sup>、と法典を知り、ヴェーダに通曉したバラモンたち<sup>67</sup>は言った。
- (14) しかしまず私は、徳を備えた行為であれ、はっきりと<sup>68</sup>悪に染まらない行為であれ、何であれ (yat) 為された行為は、効力をもっていると、観察する。
- (15) たとえば、この世で知恵 (buddhi) と結びつき、意識的に (manasā saha) なされた微妙な行為は、この世で相応の結果を生じる。
- (16) 恐ろしい行為によって<sup>69</sup>常に悪しく (ulbaṇam) なされた知恵なき (abuddhipūrvam) 行為は<sup>70</sup>、劣った結果をもって存在するのである、ダルマを知る者よ。
- (17) 神々や尊者によってなされたある種の行為は<sup>71</sup>、ダルマを本質とする者は、行つてはならない。聞いたとしても非難してはならない。
- (18) 心で熟慮し、王よ、自分の力を知って、善行をなす者は、幸いに会うであろう。
- (19) 新しい(焼かれていない)器に入れられた水は減少し、古い器に(入れられた水は)<sup>72</sup>よく保たれて (sukhabhāvitam)(最初と)同じ状態を保つ<sup>73</sup>。
- (20) そして、水の入った器に他の水が注がれる時、(注ぐ水の)量が増えれば<sup>74</sup>、(全体の)水はそれに従って増大する。
- (21) それと同様に、王よ、この世での知恵に基づいた (buddhiyuktāni) 行為は、共通のものがなければこの世で減少するのである<sup>75</sup>。それらが、最高の善を本性としていても。

<sup>65</sup>ahimsā Cn. ahimsā, ahimsayā / ṛṭiyālopa āṛṣaḥ / (「不殺生は」とは、不殺生によって、の意味である。具格語尾の消失は古形である)

<sup>66</sup>P. cāsya vihiṃsaivāpakarṣati D.,K.: nāsya vihiṃsaivāpakarṣati Cp. apakarṣati, phalato bhramśayati / (「除く」とは、果報が消滅するという意味である)

<sup>67</sup>P. vedapāragāḥ D.,K.: brahmavādināḥ

<sup>68</sup>P. prakāṣaṃ ca D.,K.: prakāṣaṃ vā Cn. prakāṣaṃ, buddhipūrvakaṃ prakāśya, jñātvā / ṇamulantam idam / (prakāṣam とは、認識に基づいて輝いて、すなわち認識して、という意味である。これは kṛt 接尾辞 am を語尾にもつ gerund である)

<sup>69</sup>ugreṇa karmaṇā N. ugreṇa hiṃsreṇa / (「恐ろしい」とは、殺害する、という意味である)

<sup>70</sup>karma sevitaṃ nityam ulbaṇam Cn. nityam, avyabhicāriphalam / ulbaṇam, narakāvaham / (「常に」とは、逸脱しない結果をもつ、という意味である。「悪しき」とは、地獄に運ぶ、という意味である)

<sup>71</sup>kṛtāni yāni karmāṇi Deussen: An [gewissen] Taten Ganguli: As to those acts (of a doubtful or unrighteous nature) N. quotes an episode of Viśvāmitra who killed the sons of Vaśiṣṭha, as the result of which he did not fall into naraka. Ganguli refers to this in the footnote No.2 of the page 350.

<sup>72</sup>navetare Cs. itare purāṇe samnyastaṃ salilam yathā abhāvam, hīnatvaṃ nāpnoti / (他の古い器に入れられた水は、存在しないかのごとく (?), 減少することはない)

<sup>73</sup>tathābhāvam prāpnoti Cn. tathābhāvam, yathā pūrvarūpaṃ sthitaṃ tathārūpatvam eva / (「同じ状態」とは、以前の姿のように存在する姿のことである)

<sup>74</sup>P.,D.: vṛddhe K. tad dhi

<sup>75</sup>P. nasamāniha hīnāni D.,K.: samāni caiva yāniha

- (22) 王は武器をもつ者、反乱者 (unnata) に<sup>76</sup>勝つべし。そして正しく人々の保護を行うべし。多くの祭式のために火は (家長によって) 積まれるべし。(人生の) 最後あるいは中間において (力が失われたならば)<sup>77</sup>、森に依存して住むべし。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.280; metre — v for v — v, p.321; Half a complete stanza of Vaiśvadevī)
- (23) 自制を保ち、ダルマに専念する人は、自分を見るかのように生き物を見るべし。より重き人々を、力を尽くして (ātmaśaktyā), 真実の善行によって、よく (sukhaṃ) 尊敬すべし、人の主よ。

[281 章] (B.292 章, C.10747-10769, K.298 章)

パラージャラ仙は言った。

- (1) 誰が他の誰を助けようか。誰が他の誰に与えようか。人というのは (ayaṃ), あらゆる行為を自分で自分のために行うものである。
- (2) (人は) 威厳を欠いた者を (gauraveṇa parityaktam) 愛着なく避けるべし。それが同腹の兄弟であっても。まして他の凡夫は (避けるべし)。
- (3) すぐれた者の贈与と、すぐれた者からの受納は等しい。両者のうち、再生族が施与するならば (dvijasya prayacchataḥ), 贈与の方がより善い。
- (4) それぞれのヴァルナによって (varṇair) 正しく獲得され、正しく増加した財産は、ダルマのために努力して守られるべし、と定まっている。
- (5) ダルマを求める者は、人を傷つける行為によって財産を得るべきではない。能力に応じてあらゆる為すべきことを為すべし。繁栄を思うことなかれ。
- (6) 清浄な者が冷たい、あるいは火によって熱された水を、でき得る限り、賓客に出すならば (dattvā), 飢えに苦しむ者に (対して与えた) 果報を得るのである。
- (7) 偉大なランティデーヴァ王は、世間で望まれる完成を達成した。その彼は<sup>78</sup>、まさしく果実と木の葉そして木の根を用いて尊者たちを礼拝したのである。
- (8) 彼はその果実と木の葉のみによってマータラ仙を満足させた<sup>79</sup>。それゆえ、大地の王シャイビヤ (シビ族の王) も最高の地位を得たのである。

<sup>76</sup>P. sāyudhās D.,K.: śatravaś Cs. sāyudhāḥ, hiṃsāparāḥ /unnatāḥ, utpathagāmināḥ / (「武器をもつ者」とは、殺害に専念する者である。「反乱者」とは、誤った道を行く者である)

<sup>77</sup>P. ante madhye vā D.,K.: antye madhye vā N. antye vayasya viraktenāpi madhye madhyame viraktena / (「最後に」力が失われても、あるいは「中間」すなわち、その間において失われても、という意味である)

<sup>78</sup>P. arcitavān asau B.,K.: arcitavāṃś ca saḥ

<sup>79</sup>sa māṭharam atoṣayat Cn. (reading samāṭharam) samāṭharam, māṭhareṇa pāripārśvikeṇa sahitam samāṭharam sūryam / māṭharaḥ piṅgalo daṇḍaścaṇḍāṃśoḥ pāripārśvikāḥ ity amarāḥ (1.31) / (samāṭhara と読んでいる。従者を伴っているのが、samāṭhara であり、太陽のことである。Amara Kośa 1.31 によれば、māṭhara, piṅgala, daṇḍa, caṇḍāṃśa, pāripārśvika は同意語である) Cs. māṭharo nāma kaścid rṣiḥ / (マータラとは、ある聖仙の名前である)

- (9) 人は、神、賓客、召使に対して、祖霊に対して、そして自分に対しても同様に、債務ある者として生まれる。そこから、債務なき状態に至るべし。
- (10) 偉大な聖仙に対するヴェーダ学習によって、神々に対する祭式の実行によって、祖霊に対する祖霊祭と布施によって、人々に対する尊敬によって、
- (11) 自分に対しては、言葉から、そして残余を取ることによって<sup>80</sup>、そしてまた(身体の維持によって<sup>81</sup>(債務なき状態に至るべし)。召使の集団に対しては、最初から正しくダルマを行なうことを願うべし<sup>82</sup>。
- (12) 尊者たちは、努力によって完成し、財産がなくとも、正しく祭火を祭った後、成就に至る。
- (13) 大きな幸運をもつリチーカの息子は<sup>83</sup>、(リグ・ヴェーダ)讃歌によって祭式の分け前にあずかる神々を讃えた後で、ヴィシュヴァーミトラの息子となった。(Cf. Ait. Br.7.13 Śunaḥśepa の物語)
- (14) シヴァ(devadeva)の恩寵によってウシャナスは金星になった。そして(tu)女神を讃えた後、天空で威光に覆われ歓喜した。(cf. MBh. XII.278)
- (15) アシタ・デーヴァラ仙、ナーラダ仙とパルヴァタ仙、カクシーヴァット仙、ジャーマドアグニ仙の息子ラーマ仙、そして輝きある<sup>84</sup>ターンディヤ仙、
- (16) ヴァシシュタ仙、ジャマドアグニ仙、ヴィシュヴァミトラ仙、アトリ仙、バラドヴァージャ仙、ハリシュマシュル仙、クンダダーラ仙、シュルタシユラヴァス仙、
- (17) これら偉大な英知ある聖仙たちは、心を集中して(リグ・ヴェーダ)讃歌によってヴィシュヌ神を讃えた後、苦行によって、彼の恩寵から、成就に達した。
- (18) 善き人々は、まさに彼を讃えた後、尊敬に値しない者から尊敬すべき人となった。しかし、この世で、忌むべき行為を為したならば、繁栄を望んではならない。

<sup>80</sup>P. vācaḥ śeṣāvahāryeṇa D. vācā śeṣāvahāryeṇa K. pākāśeṣāvahāryeṇa Cn. vācā, vedaśāstramayyā, śravaṇamananādinā / śeṣāvahāryeṇa, pañcayajñāśeṣeṇānena / (「言葉によって」とは、ヴェーダ聖典からなる、聴聞と思考などによって、という意味である。「残余を取ることによって」とは、五種の祭式の残余の食事によって、という意味である) Cp. vācā, na / śeṣāvahāryeṇa, devatādiśeṣabhojanena / (「言葉によって」とは、よき言葉によって、という意味である。「残余を取ることによって」とは、神などの残余を食べることによって、という意味である)

<sup>81</sup>pālanenātmano 'pi ca Ca. pālanena, śarīradhāraṇeṇa / (pālanā 守護とは、身体の維持によって、という意味である) Cp. śarīrarakṣayā / (身体の保護によって、という意味である)

<sup>82</sup>P. cikīrṣed dharmam āditaḥ D., K.: cikīrṣet karma āditaḥ

<sup>83</sup>ṛcīkatanayo Ca. ṛcīkatanayo gālavah / (「リチーカの息子」とは、ガーラヴァである) Cn. ṛcīkatanayo 'gamadity atra ajīgartasuto 'gamad ity paṭhanīyam / (「リチーカの息子は…となった」とは、ここでは、アジーガルタの息子は…となった」と読むべきである)

<sup>84</sup>P. tathāśmān D., K.: tathātmavān

- (19) ダルマによって存在するものは、真実のものである。アダルマによって存在するものは嫌悪すべし。この世で財産を望んで、永遠のダルマを捨ててはならない。
- (20) ダルマを本質とし、祭火を祭壇に置く人は、善を為すすぐれた人である。なぜならば、ヴェーダはすべて、すぐれた王よ、三種の祭火の中に存在している (sthitās) からである、威光ある者よ。
- (21) 祭火を置いたバラモンの祭式は損なわれることはない。義務を怠ったアグニホートル祭はよきものではない。(それよりは) 祭火が置かれないほうがましである。
- (22) 祭火、アートマン、母、誕生させる者である父、そして師は、適切に敬われるべきである、虎のごとき人よ。
- (23) 自惚れを捨てて、長上に仕え、英知をそなえ、欲望なく<sup>85</sup> 歓喜を伴って見る者は、勤勉さを失わず<sup>86</sup>、ダルマをそなえ、他人を傷つけることのない (?)<sup>87</sup>、この世で、高貴な人として、良き人々によって尊敬されるのである。

<sup>85</sup>klībah Cn. klībah, kāmahīnaḥ / (klība とは、欲望を欠いている、という意味である) Cs. mṛduḥ / (穏やかな、という意味である)

<sup>86</sup>P.dākṣyēṇāhīno D.,K.: dākṣyēṇa hīno Cn. dākṣyēṇa spandena hīnaḥ, āyāsāsūnyaḥ san / (dākṣya とは動作であり、それがなく、努力を欠いている、という意味である) Cv. dākṣyēṇa hīna ity atra dākṣyaṃ kalāsu kauśalyam / (ここでは、dākṣya とは部分における (?) 幸福である)

<sup>87</sup>nadānto N. nadānta ity ekaṃ padaṃ dānati chinati dāntaḥ dāna ārjavacchedanayor ity asmāt kartari ktaḥ tadanyo nadāntaḥ naikadhetivat samāsaḥ hīmsāsūnya ity arthaḥ / (nadānta は一語である。dānta とは、分割する、切断するという動詞に由来する。dāna という能動形は、正直と切断の意味において用いられる (?) というこのために、能動形 (行為者)dāna のところに受動形 (過去分詞)dānta が用いられている。dānta でないものが nadānta であり、naikadhā と同様の合成語であり、危害のない、という意味である) Ganguli: who is destitute of the desire of inflicting any kind of harm (upon any one) Deussen: nicht unbezähmten Sinnes 中村 [2000]: 害意のない Oberlies[Grammar] pp.359-360 (c) na-compounds